

みらいの**トビラ** 

## “財布を落としても戻ってくる国”という幻想

川口盛之助×デービッド・アトキンソン：日本の「真の国力」とは（その1）

構成：久我 智也 2016/07/22 00:00

2020年東京オリンピックを前にして、様々なメディアで日本を見つめ直す企画が増えている。その中での日本は、規律正しく、誠実で、優れた技術を持った国として紹介されている。しかし、世界から見た日本は、本当にそのような国なのか。知力やスポーツ、エンターテインメント、芸術などに関わる14の専門分野にわたる才人たちの活躍を定量化し、日本のお国柄を分析した『**日本人も知らなかった日本の国力（ソフトパワー）**』（ディスカヴァー21）の著者である川口盛之助氏と、国宝や重要文化財の補修を手がける小西美術工藝社 代表取締役社長のデービッド・アトキンソン氏が「日本は世界からどう見られているのか」、そして「日本はこれからどうなっていくのか」について語り合った。



川口氏（左）とアトキンソン氏（写真：加藤 康）

## 情緒的な“証拠”で国を語るべからず

—— 川口さんが執筆した『日本人も知らなかった日本の国力（ソフトパワー）』は、日本のお国柄を才能の総量を表す「グロスナショナルタレント（GNT）」という独自指標で定量分析したものです。文化を可視化するという、今までにない切り口の日本文化論を読んで、アトキンソンさんはどのような感想を持ちましたか？

**アトキンソン** 最近、いろいろなメディアで日本にとって都合のいい話ばかりを取り上げ、「日本は素晴らしい国だ」と持て囃すような企画が目立ちます。オリンピック招致のときには「日本は財布を落としても、ほぼ確実に戻る国」ということが話題になっていましたけど、実際のデータを見てみると、財布が戻ってくるケースは4割ほどでしかない。

つまり、「財布を落としてもほぼ確実に戻る」という事実はないわけです。そうした一部の事例だけを挙げて日本は素晴らしい国だと言っても、それは本当の国力とはいえません。

これは、ビジネスを論ずるときにも当てはまることです。ビジネスはしっかりとデータを分析し、きちんとした裏付けが必要なのに、一部の成功事例を取り上げて、あたかも日本全体が成功に寄与したかのようにフィーリングや情緒で提示する話になってしまいがちなんですよ。

そうした中で、川口さんの著書では、非常に多くの数字を出して日本の国力（ソフトパワー）を客観的に分析しています。日本に都合のいい数字や分野だけではなく、日本が世界の中で下位に位置するテーマも取り上げている。データを用いることで、真の国力というものを知ることができる。こういったアプローチは非常に素晴らしいと思いました。

**川口** ありがとうございます。アトキンソンさんもおっしゃるように、テレビなどで日本人や日本文化を論じようとするとき、どうしても日本を自画自賛し、いいお話にまとめたものになってしまいがちです。

でも、そうした日本を礼賛するばかりのものが増えていくと、本当の日本というものが分からなくなる。「日本人特殊論」のような右翼的、国粹的な話になって、これは危ういことなんじゃないかとも思うんです。

だから私は、もっと客観的に、定点観測するように日本のソフトパワーを分析してみたかったですよ。

## 日本が持つ「ソフトパワー」という資産

**川口** そもそも今回の本の執筆は、私が抱えるコンプレックスから始まっているんです。

**アトキンソン** コンプレックスですか？

**川口** ええ。私は今55歳ですが、この年齢になっても欧米コンプレックスがあるんです。若い頃は洋楽にあこがれ、外車にあこがれていましたから。

日本は先進国といわれて久しいですが、私の中には「日本は本当に世界から尊敬されているのだろうか？」という思いがあります。アトキンソンさんは日本を愛してくださっているので、こういうことを話したら「もっと自信を持ちなさい！」と叱られてしまうかもしれませんが（笑）。ただ、「何だか自信が持てない俺たち…」という思いは、多くの日本人が感じているものだと思います。

特に今の日本には、少子高齢化という大きな社会課題があります。私は未来予測をテーマに研究を進めていますが、どの未来予測本を読んでも「日本の未来は暗い」と書かれています。

平均寿命が延びたことで生物学的には成熟した国になっているけれど、「本当の意味で日本は成熟した国なんだろうか？」「世界は日本を成熟した国として見ているのだろうか？」という思いが出てきたんです。本当の日本の評価を知るためには客観的な数字から見るしか



川口氏の著書『日本人も知らなかった日本の国力（ソフトパワー）』（ディスカヴァー21）

ないと思いました。

データで国を見ると、「国内総生産（GDP）」をはじめ、「1人当たりGDP」「軍事力」「人間開発指数（HDI）」といった指標もありますが、それでは表面的なことしか見ることができない。だから、もっと深層にある「感動」という部分に着目しようと考えました。感動を与える人、つまりはその国の「ソフトパワー」を数値化することで、「日本人は本当に世界に感動を与えているのか」を分析しようと思ったところが出発点です。

「クールジャパン」という今や使い古された言葉がありますが、「クールって、何だろう」とずいぶん考えました。小学校くらいでモテるのは、足が速かったり、算数ができたりする子供でした。大人になっても、そういう基本的なところを生かして生活ができている人。それが今回の本で取り上げた様々な分野の達人たちです。そういう人たちを愛でる貴族的な目や社会的な余裕こそが、「クール」の源泉ではないかと\*1。

\*1 “クールとは何か”についての論考は「[クールジャパンとモテる男の条件](#)」を参照  
**アトキンソン** なるほど。川口さんは、この本を読む人にどう感じて欲しいんですか？



デービッド・アトキンソン。小西美術工藝社 代表取締役社長。1965年英国生まれ。オックスフォード大学で日本学専攻。アンダーセン・コンサルティング、ソロモン・ブラザーズを経て、1992年にゴールドマン・サックス入社。日本の不良債権の実態を暴くレポートを発表し、注目を集める。1998年に同社マネージングディレクター、2006年同社パートナーを経て2007年退社。2009年に小西美術工藝社に入社し、2011年から同社会長兼社長に就任。（写真：加藤 康）

**川口** 先ほども話したように、今、日本の未来を悲観する声が多くありますけれど、自分たちには「ソフトパワー」という重要な資産があるんだということを知ってもらいたいです。それによって、我々日本人は自信を持っていいと伝え、未来を悲観することの歯止めになればいいなど。

同時に、これだけの資産がありながら、実はその資産をちゃんとお金に換えることができていないという現実気づいて欲しいとも思います。ソフトパワーをしっかりとお金にしていけないと、国は持たないんですから。

## 「日本人は、お金もうけが下手」、その真相

——川口さんの本を読むと、確かに多くの分野で世界の最先端に日本人がいながら、お金もうけには結び付けられていない現状が浮かび上がってきます。アトキンソンさんがかねて日本人のお金もうけ下手を指摘していますが、なぜそうなるのでしょうか？

**アトキンソン** お金もうけが下手というよりは、これまで日本人はお金もうけ自体をする必要がなかったんです。

終戦直後、日本の人口は約7200万人でした。これは、現在の英国やフランスよりも多い。戦争が終わった時点ではドイツとほとんど同じような人口だったのに、現在は日本が1億2700万人、ドイツは8000万人強です。米国は移民を迎えて爆発的に人口が増えましたが、戦後に国民が激増した日本のような国は先進国ではほとんど例がありません。

加えて、戦争が終わった時点で日本は経済的に最もダメージを受けていた。それが復興し

で元に戻っていくことと並行して、人口の激増が起きたわけです。国の経済規模は「人口×1人当たりの生産性」ですから、その人口ボーナスの中で真面目にビジネスをしていけば、黙っていてもがんが受注が増えてお金が入ってくる。そして、それが経済成長につながっていくという正の循環がありました。

つまりは、日本ではすべてが追い風の状況で、アゲインストの風を体験していなかったんです。だから、特別にお金をもうけようとする必要ではなかった。何をやってもうまくいく印象だったのですから。その意味では、「戦後の名経営者と呼ばれる人たちは本当に天才的だったのか」とクエスチョンマークをつけてもおかしくないかもしれません。

米国はかなり前から経済成長が止まると予想されています。でも、実際は止まっていません。それは、1990年に約2億4000万人だった米国の人口が、今は3億2000万人程度に増えていることが大きい。25年でだいたいドイツ1国分の人口が増えていますから、それはモノがどんどん売れるよねと。人口動態的には、戦後の日本はそれと同じ状況だったわけです。

ただ、今の日本では、その追い風はやみ、ただ地道に仕事をしているだけではダメになってしまった。こういった背景があるので、日本人はお金もうけが下手というよりは、70年間やってこなかったということではないかと思うんです。下手というのは根本的に「できない」ということですが、そうではない。

**川口** 日本人は特定のニッチな分野で活躍していても、その分野でお金もうけ色が強くなると撤退してしまうという傾向があるんですね。



川口 盛之助（かわぐち・もりのすけ）。株式会社盛之助代表。1984年、慶應義塾大学工学部卒、イリノイ大学修士課程修了。日立製作所を経てアーサー・D・リトルに参画。各種業界の戦略立案プロジェクトに広く携わり、同社アソシエイト・ディレクターを務めた後に、株式会社盛之助を設立。国内のみならずアジア各国の政府機関からの招聘を受け、研究開発戦略や商品開発戦略などのコンサルティングを行う。morinoske.com（写真：加藤 康）

今回の本の中では300種類くらいのデータを集めて分析していますが、何かの分野でお金の匂いがすると世界中がばーっと集まってくるのに、気が付いたら日本は退場している。日本では「お金は汚いもの、派手にもうけることは美しくない」という昔からの教えがある。そうした意識とリンクしているのかもしれない。

例えば、ボードゲームやカードゲームのような「マインドスポーツ（頭脳スポーツ）」や、コンピューターゲームの「eスポーツ」の分野は最近、賞金として大金が動く世界になっています。テレビゲームといえば日本人というイメージがありますが、それはゲームの作り手側の話で日本人のゲームプレイヤーは賞金稼ぎとしてなかなか活躍できていません。

**やるのか、やらないのか決めてください**

**川口** その逆に、賞金が発生しない、名誉だけを競うようなゲームでは日本人プレーヤーが上位に食い込んだりもしている。とてもあっさりとしていて、「こういうところも含めて日本人ってそういう人だよ」という気がします。

とはいえ、先ほどアトキンソンさんがおっしゃったように、何もしなくても日本が成長できた時代は終わっています。これからは様々な工夫をして、賢くならないと生き残れなくなっている。

そうなる、ナショナルブランドイメージというものが求められるようになります。日本人と聞いた時に、海外の人々はどんなイメージを抱くのか。

「財布を落としても必ず戻ってくる」というようなエモーショナルな話ではなく、データに基づいて、客観的に見た日本人像とはどのようなものか。それを突き詰め、そこに価値を付加することで、お金に換えていくことが、これからの時代には必要になってくると思っています。

**アトキンソン** 川口さんの本を読んで、「日本人はやればできるんだ」ということがデータで証明されていると感じました。ビジネスでも、トヨタ自動車のように「やればできる」ことを証明している企業がある。ただ、多くの人がそこまでやっているかといえ、そうではない。

「お金が汚いもの」という考え方は武士の精神で日本的なのだという人もいますが、歴史を見れば、武士は当時の人口構成比の8%でしかなくて、残りの92%はお金のことを考えていたわけです。

私の講演では「やるのか、やらないのか決めてください」と、最後に決まり文句を話します。「日本人はやればできる」ということが分かっているのに、なぜやらないのか。これは私が日本で生活した26年間の大きな謎なんです。

・ [次回に続く](#)



この記事のURL : <http://techon.nikkeibp.co.jp/atcl/column/15/317534/071100019/>

Copyright © 2016 Nikkei Business Publications, Inc. All Rights Reserved.

このページに掲載されている記事・写真・図表などの無断転載を禁じます。著作権は日経BP社、またはその情報提供者に帰属します。